

「ゆらぎ」経験における職業的アイデンティティ形成過程の研究
—地域包括支援センターにおけるソーシャルワーカーのナラティブから—

○ 社会福祉法人嘉誠会 中野地域包括支援センター 氏名 高村 雅代 (010299)

キーワード3つ：職業的アイデンティティ ゆらぎ ナラティブ

1. 研究目的

塩見ら（2021）によると、職業的アイデンティティを形成することは、バーンアウトを防ぐ一つのきっかけになり、職務に対して肯定的な感情を抱くことができることを示している。しかし、ソーシャルワーカーは職業的アイデンティティを形成することが難しい職種であるといわれている。なぜなら、業務内容が多岐にわたり、職種も多様かつ焦点が定まっていないことから、専門性が曖昧であることが理由の一つとして挙げられる。そのようなことから、ソーシャルワーカーは挫折感や不全感を痛感しながら日々業務に励むことが多い。そこで本研究では、ソーシャルワーカーとして従事するうえで感じる挫折感や不全感の総称を「ゆらぎ」とし、その「ゆらぎ」経験がソーシャルワーカーの職業的アイデンティティ形成に至る過程を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

本研究の視点としては、ソーシャルワーカーの職業的アイデンティティ形成に至るまでの過程について調査するという観点から、まず文献をもとに職業的アイデンティティの構成要素を抽出し、それを図示化した。そこからさらに、職業的アイデンティティに至るまでの分析枠組みを作成し、それを用いてインタビューを実施し「ゆらぎ」経験からの職業的アイデンティティ形成過程を明らかにした。調査方法は、地域包括支援センターのソーシャルワーカーとして10年以上勤務している3名を対象とし、半構造化面接を行った。なお分析方法は、ナラティブ分析の構造分析を採用した。

3. 倫理的配慮

本研究の調査は、関西福祉科学大学研究倫理審査委員会の承認後（承認番号22-50）、また一般社団法人日本社会福祉学会「研究倫理規程」に基づき実施した。調査対象者には、研究の目的や方法、プライバシー保護のための対策、研究成果を学会等での発表や学術雑誌への論文として投稿する予定であることを記載した書面にて説明し、同意を得た。なお、開示すべき利益相反（COI）はない。

4. 研究結果

先行研究から作成した分析枠組みをもとに、今回の研究結果では「ゆらぎ」経験から職業的アイデンティティを形成する過程は2パターンあることが明らかになった。

まず1パターン目は、現場で「ゆらぎ」を経験しながら、現場で職業的アイデンティティ形成に至る影響も受け、最終的に職業的アイデンティティ形成に至ったケースである。これは、現場で経験した「ゆらぎ」を現場で向き合い、職業的アイデンティティ形成に至っているということである。職業的アイデンティティ形成のために調査対象者が努めたこ

とは『先入観』『決めつけ』をしていたことを自覚し、それらを取り払うように努めたこと」「実践モデル（待つ姿勢・心情を適切に表現できる表現力）を身につけたこと」「他職種や同職種、クライアント、家族と関わる時間や雰囲気を作ったこと」「新しい仕事を担ったこと」「自己省察ができる時間を作ること」「クライアント及びその家族が後悔しないような支援をするように努めたこと」「次の『ゆらぎ』のための準備・勉強期間に入ったこと」の7つである。

2パターン目は、現場で経験した「ゆらぎ」を業務外の時間を使って向き合い、その結果、職業的アイデンティティ形成に至ったケースである。職業的アイデンティティ形成のために調査対象者が努めたことは「勉強の必要性を痛感し、業務外の時間を使い、資格取得に努めたこと」「私生活でも相談できる相手をみつけたこと」「ソーシャルワーカーとクライアントは家族ではなく、あくまで仕事上での関係性であることを認識したこと」の3つである。

5. 考察

今回の研究結果からいえることは二つある。

第一に、現場で「ゆらぎ」を経験しながら、現場で職業的アイデンティティ形成に至る影響を受け、最終的に職業的アイデンティティ形成に至ったケースがほとんどであることが明らかになった。しかし、現場で「ゆらぎ」を経験しつつも、現場で向き合うことが難しい場合は、業務外の時間を使い資格取得に励行したり、私生活でも相談できる相手を見つけたことも同時に明らかになった。

第二に、職業的アイデンティティ形成は現在の職場のみではなく、過去の職場から影響を受けていることも明らかになった。調査対象者の中には、地域包括支援センター以外での経験についても語っている。それは、職業的アイデンティティが2～3か月といった数か月で形成されるものではなく、数年といった長期間かかって形成されることを示している。実際に松尾（2006）及びエドガー・H・シャイン（Edgar H.Schein）（1999）は、精度の高いスキルを習得しかつクライアントから信頼・感謝され認められるようになるにはおよそ10年の年月が必要であると述べており、本研究結果を裏づけるものとなっている。

付記

本研究は、2023年度関西福祉科学大学大学院修士論文を一部加筆・修正したものである。

引用・参考文献

松尾 睦 『経験からの学習—プロフェッショナルへの成長のプロセス』 同文館出版 2006年。

エドガー・H・シャイン（著）（二村敏子・三善勝代訳）『キャリア・ダイナミクス』 白桃書房 1991年。

塩見直子・鈴木英子・松谷弘子・加古幸子「大学病院の看護師の職業的アイデンティティとバーンアウト」『日本健康医学会雑誌』第30巻2号 2021年。